ピリピ人への手紙　第２章　6～8節（愛の不自由）

日増しに行動範囲が狭まってくるこの頃だ。季節の移り変わりを野や山に愛でることは出来ず、門外に出ることが制約されている。不要不急の外出を自粛するよう毎日アナウンスされている。普段の生活、遊興が出来ない、自粛の不満やストレスが報じられている。

かたや、医療、介護、社会インフラに携わる人々の日夜たがわず決死の働きが続く。その方たちの不安や、労働の軽減のために行動の自粛が求められる。病室からは感染者の声が発信され、路上の人たちへ危険を回避して欲しいと体をはって警告する。誰かの命を守るために発信し続ける。それでも場所によっては人が群れ行き交う。

それでも、行きたいところに行き、集まりたいところに集まる人たちもいる。中には行かなければならない人たちもいる。あげればきりがない行動の訳がある。それだから、自粛を促し、一緒に命を守ろうと伝え続ける。

最も恵まれたところから、不自由な世界に飛び込んできたお方がいる。ご自分を無にし、奴隷の姿をとり、卑しくし、死にまで行かれた、それも断罪の十字架にまで行かれたお方がいる。愛の不自由から、自由人を生む。